

構造と機能

児 玉 徳 美

1. 構造とは何か、機能とは何か

構造 (structure) や機能 (function) は言語を論じる際、よく用いられる用語の代表的なものである。両語は頻用されるとはいえ、あいまいであり、人によりその内容が異なる。近代言語学の父と呼ばれる Saussure (1916, *Cours de linguistique générale*, Payot) 自身ほとんど使わず、その索引にも載っていない。しかしその後の言語学が Saussure の基本的概念を継承発展させる中で頻用するようになった。両語の厳密な意味を検討することにより言語がどのような構造をもち、どのような機能を果しているかを明らかにし、今後の言語分析に役立てば幸いである。

日常的に構造や機能は次のように用いられる。

(1) 構造とは

(機械や組織などの) 全体を成り立たせる内部の仕組み、部分部分の組み立て。例：自動車の構造、心臓の構造

(2) 機能とは

物の働き、活動できる能力。例：心臓の機能、国会の機能

この世に存在するすべてのものが、孤立して存在せず何らかの形につながり、21世紀の地球という惑星を作り上げている。すべての事物はこの世に誕生すると同時に時空に関係するだけでなく、関係態として他の事物と何らかの関係をもつ。全体を構成する諸単位 (または諸要素) が有機的な相互関係を保っている統一体の姿かたちが構造であり、その有機的な相互関係をもつ諸単位の働きが機能である。

人の身体は約 60 兆個の細胞からなるといわれる。そのうち、例えば脳はニューロン (神経細胞) からなり、その数は大脳・小脳を合わせて 1000 億個とも 2000 億個ともいわれている。その神経細胞が統一体として相互作用する脳の機能により知覚・運動・感情・記憶・知識・思考などが可能になる。もちろん人体には無用の長物と呼ばれるものもあり、構造上存在しても機能上何の役割も果さないものがある。例えば盲腸は構造上小腸から大腸へ変わる部分に存在するが、人体では何の機能も果していない。ただしその先端にある中垂に炎症が起きると虫垂炎 (盲腸炎) になる。自然界ではミクロの素粒子からマクロの宇宙に至るものまで、存在するものが時間の経過とともに変化し、絶えず生成消滅を繰り返している。その鍵を握るものが構造や機能である。

言語分析においても「構造」や「機能」は日常的に用いられる (1) (2) とほぼ似た意味であり、概略次のように定義される。

- (3) 言語を構成する諸単位（または諸要素）が有機的に織り成す関係の総体が構造であり、構造をなす各単位が果す役割が機能である。

言語においては表現が変われば意味も変わり、構造には常に機能が付随している。言語分析が科学であるためには、当然のことながら、用語には厳密な規定が求められる。(3)の内容は次のような疑問に答えるものでなければならない。

- (4) a. 諸単位はどのように規定されるのか。
 b. 諸単位が結ぶ有機的な相互関係とはどのようなものか。
 c. 言語の総体は部分の諸単位からなるにしても、その諸単位はどのような階層（あるいはレベル）をなしているのか。

このような疑問に答えるためには、その前提として一体どのような言語を分析対象とするのかが問われる。現実の言語表現は音が切れ目なく線条的に流れる連続体をなしている。しかし言語分析において、実際に発話される言語表現の実質 (substance) をそのまま転写分析したのでは 100 人 100 通りの音声であり、共通項を見出すことが不可能である。分析対象とする言語は具体的な実質ではなく、万人が共有する言語知識として抽象化された形相 (form) である。英語の form (形式) はしばしば意味に対立するものとして音声や外見上識別できる文字や文法形態を指すことが多いが、形相は形式と違って音声（や形態）と意味の両面に属する言語知識を指す。例えば dog という語は [dɒg] という音声の形相であり、同時に dog でない他の語と区別される意味の形相からなる。形相としての言語は連続体をなすものではなく、切れ目が内在するものとして分節・範疇化されていく。

形相としての言語を前提にして (4) への答えが問われる。まず (4a) からみていこう。言語の諸単位は形式（音声）と意味で別個に設定されるが、言語全体の中で諸部分が占める構造および機能の両面で他の単位との差異対立に基づいて規定される。諸単位は相互に差異対立があってはじめて存在価値をもつことになる。(4b) は構造における有機的な相互関係として次の 2 種が想定される。

- (5) a. 諸単位がひとまとまりの連鎖 [範疇] として配列される統合関係 (syntagmatic relation)
 b. 諸単位が形式・機能・意味などで他の単位と交換可能な選択関係 (paradigmatic relation)

上記の 2 種はいずれも Saussure (1916) によって提案されたものである。(5a) における各単位はその上位範疇の単位に対してその部分を構成し、その下位範疇の諸単位に対してその全体を構成する。(5b) においては同じレベルに属する諸単位が差異対立に基づいて交換可能な類であると規定される。(4c) が問う諸単位の階層とは、前者の (5a) では、概略、音素・形態素・語・句・節・文・言説からなり、後者の (5b) ではほぼ同じレベルに属する類が、例えば形態素の場合、語幹・派生接辞・屈折接辞などに下位区分される。

体系 (system) という用語がしばしば広義に構造と同義で用いられる。逆に構造や体系を狭義に解釈して (5a) に属するものや意味に対立する形式を構造と呼んだり、(5b) に属して同じレベルで交換可能な類を (選択) 体系と呼ぶこともある。この場合、レベルとしては音素やアクセントの音声面を扱う音韻体系、形態素から文に至る形態変化・品詞・文法規則などを扱う語彙文法体系、言説の

秩序や言語と文化の関係を扱う言説体系などがある。最後の言説体系は今日ほとんど未開拓の領域である。

機能とは「構造をなす各单位が果す役割」と(3)で規定したが、同じ階層や領域に属する構造上の諸単位の働きだけでなく、構造上異なる階層や領域に属する単位が結合する際の働き〔役割〕をも示す。本来、機能とは二者間の関係を示す関係概念である。そのことは機能を(2)で「物(A)の働き(B)」、(3)で「各单位(A)が果す役割(B)」と規定していることからもうかがえる。言語が形式と意味からなるだけに、言語機能の典型は形式と意味をつなぐ役割であるといえる。(6)を例に構造と機能の関係をみてみよう。

(6) The farmer kills the duckling. (農夫は子ガモを殺す。)

上例の文は構造上 the, farm(er), kill(s), duck(ling) の4語と -er, -s, -ling の3形態素からなり、冠詞と名詞、動詞と名詞が(5a)の統合関係をなしている。形式と意味をつなぐ機能としては定か不定かの定性(the)、文の種類を示す法(mood)としての平叙文、主語・目的語の文法関係、単数か複数かの数、時制(-sによる現在)などが合図されている。ここでの意味や形式には注意を要する。例えば yesterday(きのう)や tomorrow(明日)は語固有の意味と形式を有している。しかし機能は特定語句の意味や形式の個別固有のものではなく、類似の語句や構文の意味や文法・形態に共通する特性を束ねたものをさす。両語の場合、機能としては通例 time adverbial(時間を表す副詞役)をさすことになる。

構造・機能・形相・形式・体系などが言語を構成する基本的な概念であるが、多様な意味に用いられるだけに注意を要する。あいまいな用語の使用は言語分析そのものをあいまいにする。

2. 構造と機能の関係

構造と機能は必ずしも1対1で対応するものではない。先ほど(6)において主語の farmer が機能上単数であることは構造上名詞の形態と動詞の kills によって二度合図されている。逆に kills はこの文が平叙文、主語の farmer が単数、duckling が目的語、時制が現在であるという少なくとも4つの機能を合図している。

構造と機能の関係は複雑なだけに、諸言語間で構造や機能が異なるとしても不思議でない。例えば英語では音素の [l] と [r]、あるいは [v] と [b] が lover [lʌvə] (愛人) や rubber [rʌbə] (ゴム) で意味の違いを合図し、価値を有するが、日本語のラ行やバ行ではそのような区別がなく、同じ発音と捉えられ、構造・意味上音素の値が違って来る。また英語で the と a が定か不定かの定性を合図するが、ウエールズ語では構造上 the に対応する語は存在するが、a に対応する語はない。ウエールズ語では不定冠詞に対応するものが構造上示されないだけであり、不定冠詞の機能が存在しないわけではない。言語により明示的な構造がなくても意味の違いを合図する機能が存在することは珍しくない。焦点の当て方が異なるだけである。

同一言語においても類似の構造が全く異なる機能を示す場合がある。

- (7) a. John is eager to please. (ジョンは人を喜ばすのに熱心だ。)
 b. John is easy to please. (ジョンは喜ばせやすい。)
- (8) a. John ordered Bill to leave. (ジョンはビルに出て行くよう命令した。)
 b. John promised Bill to leave. (ジョンはビルに出て行くのと約束した。)

表面上 (7a,b) は類似の構造をなしているが、意味上 John は (7a) では please の主語、(7b) では please の目的語であり、異なる機能を果している。両者の違いは形容詞の eager と easy の特性に由来する。(8a,b) も類似の構造をなしている。leave の意味上の主語は (8a) では Bill, (8b) では John である。その違いは主動詞の order と promise の特性に由来する。(7) (8) の英語に対応する日本語にも同じことがいえる。Chomsky 後の生成文法が文の構造として表層構造だけを対象にしたのでは不十分で深層構造を設定したのも、このような事実を説明するためであった。

構造と機能は一見対立しているかにみえるが、実際のところ両者は相互依存関係にある。なぜなら切れ目なく続く音声の流れにどのような区切りをつけるかが構造の役目であり、区切りを助ける主要な役目が機能のためである。したがって構造が機能によって説明されたり、逆に機能が構造によって説明されたりする。例えば言語類型として文の構造は英語が SVO 型、日本語が SOV 型の語順をとるが、この場合の S (主語) や O (目的語) は機能上の範疇である。また主語の機能は英語では通例 (代) 名詞によって、時に Under the bath is comfortable. (その浴槽の下は心地がよい) や In the morning would be too late. (朝になってからでは手遅れである) のように前置詞句によって果され、日本語では通例 (代) 名詞によって果されるが、この場合の品詞は構造上の範疇である。

言語は歴史的に変化するが、多様な機能が少数の構造に特化されたり、逆に構造が機能の変化に応じて拡大・変化したりする。その現象は例えば文法化や語義の拡大にみられる。文法化とは開かれた類の語彙項目が閉じられたクラスの文法的要素に変化する過程をいう。時間の経過とともに多様な用法・意味をもつ語が特定の用法・意味に頻用され、もともとの用法・意味を消失した結果である。例えばもと動詞であった will, can などは今日助動詞となり、かつて指示詞や数詞であった the や a は冠詞となり、good-bye (< God be with you.) や Good morning. は意味が漂白化し、単なるあいさつ表現となっている。文法化と逆の現象として、語義の多様化に伴う構造の拡大がある。語が多義性を獲得すると、もとの語義を残したまま、その語の用法も広がり、結果的に語の機能や構造が拡大していく。例えば英語の fix は元来「固定する、定める」を意味する 2 項動詞であるが、「(人に食事などを) 用意する」意味を獲得すると同時に 3 項動詞としても用いられる。英語は他の印欧語族の言語に比べて広範囲に無生物主語を用いるが、これも多領域にわたる豊富な語義拡大により機能や構造が拡大した結果である。こうした一連の変化の中で英語はかつて SOV 型語順を標準としたが、今では SVO 型に変化している。

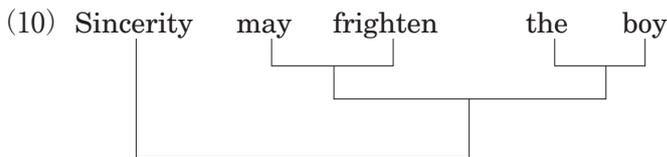
3. 言語理論における比重の違い

構造と機能は相互依存関係にあり、互いに一方が他方の助けを借りて成立している。そのため両者の規定には循環論に陥る危険やあいまいさがあり、言語理論において比重の置き方に多くの違いがみられる。その違いの背後には言語をどのように捉えるべきかの言語観の違いや科学として何を

基準とすべきかの方法論の違いがみられる。不思議にその違いはアメリカとヨーロッパの間で大きい。

アメリカでは Bloomfield (1933, *Language*, Allen & Unwin) の構造主義言語学以降、意味のようにあいまいなものは科学の分析対象から長い間排除され、分析においては厳密な形式化が追求されてきた。次例を参照されたい。

(9) Sincerity may frighten the boy. (誠実さがその少年を驚かせるかもしれない。)



- (11) a. S → NP Aux VP
 b. VP → V NP
 c. NP → Det N

Bloomfield に始まる構造主義言語学で (10) は (9) の文を直接構成素 (IC) 分析したものである。(10)では隣接する2つ以上の語が組み合わされて順次より大きい構成素に展開して最後は文に至る。IC分析の基準は拡大と置き換えの2つの原理にあり、その原理に基づいて各構成素の文法範疇(つまり品詞)が決定され、主語・目的語などの機能は別に定められる。(11)は生成文法の標準理論で(9)の構造を表示する書き替え規則の集合である句構造規則の一部である。(11)はS(文)を構成する形式素が、それぞれどのような順序にあり、またどのような文法範疇であるかを示しているが、主語・目的語などの文法機能は表示していない。その理由は主語・目的語などの関係概念をNP、VPなどの範疇概念と併記すると両者が混同されるためであり、さらには主語・目的語などの機能はすでに(11)に含意されているとみているためである(詳しくはChomsky, 1965:69, *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press 参照)。つまり主語は(11a)でAuxに先行するNPであり、目的語は(11b)でVに後置するNPであり、機能は他から推論されるものとみて明示されていない。この考えはその後Xバー理論にも引き継がれている。

Chomsky後の生成文法は、行動主義心理学に根ざし客観的に観察可能な表層構造を中心に分析するBloomfield後の構造主義言語学を徹底的に批判したが、不思議に(10)(11)には共通点がある。すなわち機能を二次的なものと考え、構造では(5a)の語順階層や文法範疇を重視している。まず英語の語順を前提に、特定の位置を占める語の文法範疇を規定し、語順と文法範疇から文法機能が引き出される。ここでは語順・文法範疇・文法機能の3種の情報を1つの規則で扱おうとしている。この方式は英語のように語順の固定した階層型言語にはある程度有効であるにしても、構成素の語順が比較的自由的な日本語や豊かな屈折形態によりどんな語順も可能であるラテン語のような非階層型言語には適用不可能である。

20世紀におけるヨーロッパの言語学はSaussure(1916)の強い影響を受け、Saussureで提案された共時態と通時態、ラングとパロール、形相と実質、統合関係と選択関係などの区分を継承発展させていった。例えばプラグ学派は言語が音素・語・文などの階層をなす構造体であることを認めるが、それぞれの階層構造は特定の目的のために存在し、つまり果すべき機能があるから存在す

るので、機能を明らかにすることこそ重要であると考えた。ここには言語は本質的に伝達機能を担うものという言語観がある。この機能的観点から主に音韻論、文体論、情報構造理論を展開した。アメリカの構造主義言語学や生成文法が構造から機能に向かうのに対して、プラーグ学派は機能言語学一派としてむしろ機能から構造に向かっている。具体的な分析法として(5)についてみれば、アメリカの言語学が(5a)の構造を優先するのに対して、機能言語学は(5b)の機能を優先している。

ヨーロッパでプラーグ学派以上に機能を重視した理論としてはコペンハーゲン学派の Hjelmslev が始めた言理学 (Glossematics) がある。言理学は Saussure に従い、ある要素または単位が存在するためには、それだけでは意味がなく、それが他の要素に対して相対的な価値を体系の中に占めることによってのみ、その存在が認められるという。この要素間に存在する相互関係が機能と呼ばれる。機能は相互依存・一方依存・相互無依存の3種に区別され、この依存関係を究明することが言理学の課題とされている(詳しくは児玉 2008:58『ことばと論理』開拓社参照)。Hjelmslev の功績は依存関係における主要素・従要素という概念が形態上の範疇でも意味上の範疇でもなく、形式と意味をつなぐ機能上の範疇であることを示した点にある。

機能を重視した分析法は今日では Halliday に始まる選択体系機能言語学 (Systemic Functional Linguistics) にみられる。この理論では経験や論理を表現する観念構成、対人関係形成、テキスト形成にかかわる3種の機能部門が設定され、それぞれの機能は語・句・節・文レベルでの選択体系に具現される。さらに3機能部門は状況のコンテキストおよび社会文化のコンテキストとも対応関係にあるという。特に後者の社会文化のコンテキストとの対応関係は言説と社会の関係を中心課題とする、ヨーロッパで盛んな批判的言説分析 (Critical Discourse Analysis, 略して CDA) に引き継がれている。CDA によると、言説は本来社会構造の一部であり、社会構造の影響を受けている。そこで科学は「価値観抜き」(value-free) で進められるべきとする従来の伝統を拒否し、価値観を含む言説と社会との関係こそ研究すべきと主張している。ここではコンテキストとともに機能が従来より格段に広範囲に及んでいる。

4. 今後の方向

各言語理論は構造と機能について焦点の当て方が異なる。その違いは単なる分析法の違いとして片づけるわけにはいかない。それぞれの争点に、言語の全体像を把握するうえでどのような問題があるかを検討する必要がある。本節では3つの争点を整理し、今後の研究方向を示唆する。詳しい考察は将来の課題とする。

第1は何を言語の原始要素とみなすかという争点である。人間は生まれつき言語能力を付与されており、いちいち教えてもらわなくても4・5歳になると母語を駆使できるようになるが、構造や機能のうち一体どのような要素が原始要素として生得的に付与され、言語を駆使することを可能にしているのかという問題がある。これは普遍文法として何を基本的要素とみなすかも関連している。生成文法では子どもの言語獲得を可能にする原始要素であるためには認識論的優位性の条件 (condition of epistemological priority) を満たすことが1980年前後に盛んに議論された。その条件を満たす原始要素としては、動作主・被動作主・着点などの意味範疇と、先行するか後置するかの語順が認められ、そこから二次的に NP、VP などの文法範疇が誘引された。主語・目的語などの機能

範疇は言語獲得の初期段階に入力として入ってくる音声からは認識不可能であり、原始要素として認められなかった。

機能範疇を原始要素として不適切とみなす生成文法の主張は、(11) でみた標準理論の延長線上にあり、機能を重視するヨーロッパの言語理論と対立する。アメリカにおいても Bresnan (1982 (ed.), *The Mental Representation of Grammatical Relations*, MIT Press) は語彙機能文法 (Lexical-Functional Grammar) を提唱する中で機能範疇を普遍文法の原始要素として認めるべきと考えている。そうすることで階層型言語と非階層型言語を統一的に説明でき、子どもが動作主などの意味素性に基づいて文法範疇だけでなく機能範疇も習得する実態に合うと主張している。

主語・目的語などの文法機能が原始要素であることは、人間の一般的な認知能力との関連で支持される。そのことは、第1に、95%を超えるほとんどの言語の標準的な語順において主語が目的語に前置していることからもうかがえる。人は2つの事物をみるとき、二者に均一の関心を向けているわけではない。焦点を当て図 (figure) になりやすいものと、図を助けて地 (ground) になりやすいものに分けられる。言語では前者が主語に、後者が目的語になる。一般に無生物より生物、不定名詞より定名詞、「(AがBと) 会う、けんかする、結婚する」のようにAとBを入れ替えても論理的に同義になる相互動詞では) 2・3人称より1人称が主語になりやすいのも、人が外界の事物を見るとき視線の違いを反映している。つまり、動きがない無生物より動きのある生物のほうが注意を惹きやすく、不定名詞より定名詞のほうが既知情報として認知しやすく、相互動詞ではこの世は自分中心に回っていると思っている1人称のほうが2・3人称より焦点を受けて図になりやすいためである。第2に、例えば「太郎 (A) が次郎 (B) に本 (C) をやった [ボール (C) を投げた]」の出来事においてエネルギーはAからBへCを移動させている。出来事の時間的な流れを追う話し手の視線を反映して主語が目的語に前置している。

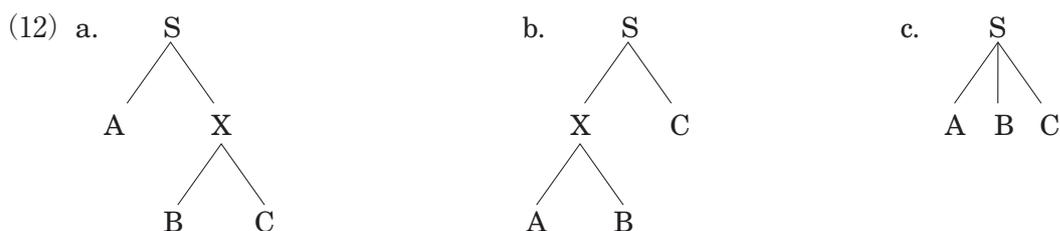
もちろん現実世界での認知や認識がすべて言語に反映するわけではない。例えば時間の経過は常識的に過去・現在・未来と大別されるが、1対1で言語の時制に反映しているわけではない。ラテン語では時制として3つの形態が区別され、英語では will, shall が未来を表すとみれば辛うじて3種が区別され、日本語では過去と非過去の2種しかなく、中国語では動詞に時制がない。藤井貞和(2010『日本語と時間——<時の文法>をたどる』岩波新書)によると、かつての日本語には時間を表す「助動辞」が「き、けり、ぬ、つ、たり、り」の6種、ないしは8種あったという。時制機能は主語・目的語などの文法機能に比べて、必ずしも認知や認識が均一な形で諸言語に反映していない。だからといって、例えば動詞の時制をもたない中国語や時間を表す「助動辞」が少なくなった日本語が時制の観念に欠けていることにはならない。出来事の時間上の違いは副詞語句やアスペクト辞などによっても示される。認知認識上の概念が言語によって多様に現れるのは時間に限らない。例えばモダリティ (法性) は話し手の意図や主観とかかわり、文の内容に対する話し手の心的態度を表す法 (mood)・法助動詞・法副詞などの多様な構造に現れる。モダリティも一種の機能であり、多様な形式と意味をつないでいる。

これまでの議論から普遍文法の原始要素は、Chomsky のいう構造と Bresnan のいう機能の両面から考察する必要があるといえる。これまで構造と機能はあたかも対立するもののように論じてきたが、機能は本来広義の構造の一部であり、主に形式と意味をつなぐものである。言語類型において主語・目的語などの文法機能や時制機能が名詞の格形態や動詞の屈折形態に基づいて形態上明示される言語と明示されない言語に分かれるが、形態上の有無と関係なく、(5a,b) での諸単位間の

形式と意味（この中には認知認識上の概念も含む）を結びつけることで構造の理解を支えている。普遍文法の原始要素としては普遍的な意味素性が主役になるが、単に言語に現れる構造や機能だけでなく、認知認識上の概念のうち言語に反映するものと反映しないものをどのように区別するかという問題も問われてくる。

認知認識上の概念である意味と結合する形態は言語によって多様に異なる。この現象は文法機能や時制機能に限らない。2節の末尾で扱った文文化や語義拡大においても同様である。あるいは連続体をなす色彩の分節・範疇化においても太陽を何色で描き、虹を何種類の色で示すかも言語によって多様に異なる。しかし動植物の種類を表す範疇は不思議に言語による違いが少ない。例えばシェパードもブルドッグも動物の大小や形状に関係なくほとんどの言語で「犬」と呼ばれる。言語上の範疇が認知認識上の差異対立によるとはいえ、認知認識上何が基本範疇となり何が周辺範疇となるのか必ずしも明らかでない。プロトタイプ効果として典型的な範疇が容易に認知される基本範疇になりやすいとはいえ、何を基準に典型的な範疇とみなすかが必ずしも明確でないためである。言語類型の異同については、何が認知認識上の判断基準になるかを今後なお検討する課題が残っている。

第2の争点は、構造の記述は構成素関係と依存関係のいずれでなされるべきかという問題である。生成文法では句構造が文の基本であり、表層構造や深層構造、あるいは変形規則を論ずる際の出発点となる。句構造は(11)の句構造規則からうかがえるように、概略、次の句構造標識で示される。



上図は句構造が2つ以上の構成素について左右の先行関係、つまり語順と、上下の支配関係、つまりS(文)を頂点として構成素のA・B・C・XがNP、VP、Nなどの文法範疇や語彙項目にまで展開され、さらに文法機能が語順から推論されることを示している。構成素は文・節・句・語と上から順次小さい単位へ階層をなしている。句構造文法を引き継いだXバー理論は同じレベルに属する複数の構成素、例えば(12a)でのAとX、あるいはBとCのうち、いずれが最終的に主要素(head)で他が指定辞(specifier)か補部(complement)になるかを定式化した。これにより次例の(不)適格性が明らかにされるとした。

(13) a. the king of England from France

b. *the king from France of England

(14) The man, who is happy, is at home. ⇒

a. Is the man, who is happy, at home?

b. *Is the man, who happy, is at home?

(13a,b)は主要素 king の補部として場所を表す前置詞句が of England, from France と2つ並んでいる。2つの句は意味・統語上主要素の king と結合度が異なる。ここで詳述しないが、N' の補部が N''

の補部に前置する (13a) は適格であるが、その語順を逆にした (13b) は不適格となる。英語の疑問文は平叙文の主語の直後に位置する *Aux* を文頭に移動させるが、統語規則は単なる語順に対してではなく、構造依存の形で、つまり階層をなす抽象的な構造に対して適用される。(14) では2つの *is* のうち、主語の NP 全体の直後に現れる *Aux* は最初の *is* でなく後の *is* であるため (14b) は不適格になる。

Xバー理論では2語以上からなる句・節において主要素・従要素が設定され、一見、依存関係を表示しているかにみえる。確かに主要素がなんであるかは検討されてきた。しかし主要素と従要素の関係がどのようなものかについては何も考察されていない。語順についても同様である。主要素に前置するか後置するかに基づいて指定辞・補部と呼び分けられているにすぎない。語順がどのような原理に基づいて成り立っているかについては何も考察されていない。これは3節で述べたように、生成文法では一貫して語順・文法範疇・文法機能を1つの規則で処理しようとしているためである。語順や文法機能が何に由来するかの考察が欠落している。

Hjelmslev のように依存関係を機軸にする依存文法では、語・句・節・文の構成素を機軸にする構成文法と違って、最小の単位である語 (または形態素) と語の二者間に働く主従の依存関係に基づいて語順・文法範疇・文法機能が別個に規定される。語・句・節・文などの範疇は文構造を説明する際、便利な階層であるが、文構造の基本的な枠組みではなく、主要語に依存する一連の語群である依存関係の結果であるにすぎない。例えば (13a,b) は主要語 *king* とそれに依存する修飾語 (または従要素) からなる名詞句となる。2つの前置詞句と主要語との結合度の違いは、一次的に主要語の内部に言及する *of* と、二次的に外部からの出所に言及する *from* の統語・意味上の特質による。(14) で疑問文をつくる場合、Xバー理論のように複雑な構造依存による統語規則は不要である。(14) の文の主要語である動詞は最初の *is* でなく2番目の *is* であり、それに依存する主語が *man* であることから (14a) が導かれる。

Xバー理論を含む生成文法では例えば *the high building* のように冠詞や *this*、*these* などの決定詞で導かれる句の呼称が人によって異なる。決定詞を主要素とする決定詞句 (*determiner phrase*) と呼んだり、*building* を主要素とする名詞句 (*noun phrase*) と呼ぶ者がある。依存関係を正面から検討していないため、ある時は形式から、またある時は意味から規定し、同じ句が異なる範疇で呼ばれ、それを阻止する手立てもない (詳しくは児玉 2010:181 『いまあえてことば・言語分析・言語理論のあり方を問う』開拓社、参照)。主要語・修飾語は形式上の範疇でも意味上の範疇でもない。形式と意味をつなぐ機能上の範疇であり、主語・目的語などの規定と似ている。依存関係が機能上の範疇であるとすれば言語普遍的なものであり、個別言語の特性で規定できるものではなく、言語類型上他言語との共通性も要求される。機能に基づいて依存関係を捉えた場合、上例は *one high building* と同じく *building* を主要語とする名詞句になる。しかし今日の依存文法では Hjelmslev のいう一方依存と相互依存の境界が必ずしも明確でなく、今後なお課題が残っている。

第3の争点は構造と機能に関連して用語が多様に用いられる点である。厳密には言語の内実の問題ではなく用語の問題である。しかし多様な言語理論を比較考量する中で新たな言語理論の方向も示唆される。まず構造と機能に関連する用語を整理することから始めよう。

「構造」とは全体を構成する諸単位 (諸要素) がバラバラの集合体ではなく、単位どうしが有機的な関係にあるものを指す。具体的には言語の形式にも意味にも適用し、(5a,b) で示した関係で言語を構成するあらゆる関係となる。「体系」という用語が構造と同義に用いられることもあり、また

(5b) に特化されることもある。「形式」とは「意味」「用法」の対立語として意味を伝える記号（しるし）であり、言語においては音声や語順・文法形式など客観的に捉えることのできるものを指す。形式と意味はさらに記号との関係で後述する。構造は意味より形式に顕著に現れるため、時には形式と同義に用いられることがある。「機能」は2つ以上のものの関係を示す関係概念であり、主要には意味（用法）と形式をつなぐものである。

このような用語に「～主義」がつくと、意味が変ってくる。言語学の「構造主義」は一般に近代言語学を確立した Saussure (1916) に始まるとされる。しかしその後、行動主義心理学の影響を受け、直接観察可能なものに分析を限定した Bloomfield (1933) 後の言語学が構造主義言語学と呼ばれることがある。Saussure と Bloomfield は分析の対象や方法が大きく異なり「構造主義」という呼称があいまいになっている。「形式主義」は言語形式が自律的構造をなすとみなし、統語論の自律性を唱える。また時に数学的に厳密な形式化・定式化を進める分析法にも適用される。生成文法は両方の意味でその代表的なものである。「機能主義」は形式の表す意味・用法を重視し、形式と意味・用法のつながり、さらには言語構造と社会現象との関係を考察する。その代表的なものに言語学や選択体系機能言語学がある。もちろん、これは言語理論を図式的に形式主義と機能主義に二分したものであり、実際には両者の中間的なものも存在する。形式と機能をどのように捉えるかについては主張が多様に分かれ、対象や分析法で大きな幅がある。

機能主義に反対する Chomsky (1979:86, *Language and Responsibility*, Pantheon) は形式と機能の間に重要な関係があることを認めながらも、その関係は直結するものではないとした。例えば心臓の機能は血液を汲み上げることにあるが、心臓が現在の姿かたちをしているのは、その機能によるものではなく、遺伝発生的な要素によるものであるという。確かに機能の必然的な結果として心臓の姿かたちが生まれるわけではない。生得的な言語能力も遺伝子によって決まっている。しかし姿かたち、または構造は静的固定的なものではなくどれほど自律性をもつのであろうか。個体発生は遺伝によるものであるとしても、固体の誕生後、周囲との関係で変化進化していく過程では個体が機能の影響を受け、構造が変化することもある。そのことは言語変化の歴史からもうかがえる。2節でみたように、機能が構造により制限を受けたり、逆に機能の変化とともに構造が変化することがあり、構造と機能は相互に影響し合っている。

3節では生成文法が機能を二次的なものと考えていると述べたが、これは生成文法の当然の帰結である。生成文法は Bloomfield 後の構造主義言語学と同じように意味分析を文法の基軸にすえてこなかった。その結果、語順や文法範疇などの構造が中心課題となるが、意味を分析対象にすることはない。そのため意味と形式をつなぐ関係概念としての機能は文法において重要な役割をはたせなくなる。先ほど第1の争点の末尾で認知認識上の概念と言語形式の関係を論じたが、このような領域においては無力である。なぜならここには統語上の形式とともに意味の異同が関連しているためである。

上記の3つの争点は言語理論により主張が異なる。形式と意味からなる言語記号のうち、主に形式にかかわる構造と機能のみを議論した場合、いずれの理論が適正であるか決着はつきにくい。このあいまいな状況を回避するためには、当然のことながら意味を分析対象に組み入れる必要がある。一般に意味を考慮することによって機能の役割が増大する。3節でみたように、言語学や選択体系機能言語学が機能を重視するのも、意味分析を文法内に組み入れているためである。Chomsky 後の生成文法と違って、Bresnan (1982) の語彙機能文法が文法機能を原始要素として認めているのも、意

味分析への配慮があるためである。構造と機能、あるいは形式と意味の相互間に存在する関係は、概略次のように要約される。

構造と機能が相互に影響し、相互に補完している関係は、通時態の言語変化だけでなく、共時態の言語活動を支える言語知識にもみられる。本来、機能は関係概念であり、言語に限らず形式と意味を備えたあらゆる記号にみられる。記号は特定の対象や意図を指し示す内的な思惟である意味とその意味を表し伝える外的・具体的な形式（つまり、しるし）からなる。人間は音楽を聞いたり絵画を見て感心したり、つまらないと思ったり、交通信号を見て立ち止まったり進んだりする。記号に接した時のこのような反応は記号の形式とそれが伝える意味に基づいている。ここでは機能を介して言語記号を理解する場合と類似の心的過程が働いている。ただし言語知識による形式と意味の関係はその要素の大小によって大きく異なる。やや図式的に言えば、語においては文法機能や統語範疇の用法などを介して形式と意味が密接に結合し、相互に他を想定する相互依存関係にあり、文においては語句の統語的・意味的情報が演算される。一方、音素・形態素のような元素的要素には形式が大きな役割を果し、意味の役割は抽象的で小さい。逆に文を超える言説ではその役割が逆転し、意味の分析には言語構造を超えて社会や文化の知識も要請される。形式と意味と同じように構造と機能も相互補完関係にある。構造と機能は常に同じ比重で対応しているのではなく、対象とする領域によって、つまり言語表現の広狭によって両者の比重が変化しながら対応している。

今日、脳科学において言語獲得や言語発達の過程で脳神経にどのような変化が生じるかを示すいくつかの試みがみられる（例えば2011年6月11日に開かれた関西言語学会大会のシンポジウム「言語発達と脳科学」など）。ここでも構造や形式にのみ依存した規則の獲得が検証されがちであるが、このような実験はあまり意義がない。言語は形式と意味が不可分に結合したものであるだけに、両者の関係について2つの点で配慮する必要がある。第1は、先ほどみたように、同じ言語表現といっても、音素・形態素・語・文・言説のレベルに応じて形式と意味の間で脳神経にかかる負荷に違いがあると予想され、その違いを明らかにする必要がある。第2は言語能力がレキシコン・統語部門・意味部門などの下位部門をモジュールとする体系であり、脳細胞がそれぞれの領域を作業分担するにしても、言語記号の生成理解が形式と意味の結合したものであるため、脳細胞の活性化において形式と意味を分担する言語野の一方だけを検証してもあまり意義はない。形式と意味の両方の言語野を同時に検証することが不可欠である。そうすることによって各モジュールにおける形式と意味の比重の違いを明らかにすることが可能になる。

従来の言語分析は、言語学や脳科学を含めて、文を最大の単位とすることが多かった。そこでは対象領域が狭く、主として形式に注目してきた。この場合、形式は客観的に捉えやすく意味との関係で機能にかかる負荷は小さく、形式の構造を軸に文の意味解釈が完了し、分析の目的は達せられることになる。しかし文を中心とする分析は日常の言語活動とかけ離れており、言語の全体像からほど遠いものである。今後、言語の全体像に接近しようとするれば、言語分析は対象領域を拡大し、言説をも対象にすることが求められる。

言説のない世界はことばのない世界に等しく、そのような世界は想像できない。語は辞書で示される慣習的な意味に用いられるだけではない。コンテクスト（文脈）により多様に解釈される。例えばI（私）やyou（君）が誰を指すかはすべてコンテクストによって異なる。またYou're a real race-horse.（お前は本物の競走馬だ）は競馬で優勝した馬に向かってだけでなく、足の速い人に向かってもいえる。語より文、文より言説と、言語表現が広がるにつれて、そこで描かれる世界は社会や文化

にまで広がっていく。社会における権力・制度・組織・常識など、人間の表面のふるまいだけでなく、その背後にある価値観や信念体系なども対象に入ってくる。言語表現はそれが用いられるコンテキストによって異なるが、同時に新しいコンテキストを作り上げていく。コンテキストも一種の記号であり、言語表現と同じ意味と形式が結合している。言説を分析対象にする場合、コンテキストとともに意味は無限に広がり、たとえ言語を習得した段階でも意味との関係で機能にかける負荷は格段に大きくなる。複雑な機能を分析してはじめて言説の背後にあるコンテキストや、話し手の正確な意図を把握することができ、言説の意味解釈が完了することになる。将来、言説を対象とし、拡大した言語機能や意味を詳しく分析することになれば、言語構造の捉え方も今日とは違ったものになるろう。

(本学名誉教授)